

# 「女子力」と 男女が共に生きていく力

現在の社会問題を根源的に考えれば、多くは「少子化」という課題に直面します。平成28(2016)年の出生数はついに100万人を割り、今後十数年で18歳人口は20万人近く減少します。本学の立場からいえば、「少子化」による小・中学校の統廃合、学級数の減少、それに伴う教員採用数の減少があり、何よりも将来、教員を目指す教員希望者が減少します。少子化をくい止めるための必要な要素は3つです。①国・行政主導の先導的な取り組み(育児休業の拡大と弾力化等)、②自治体あるいは民間参入による安価で高品質の保育所・こども園等の拡大と整備、③男性自ら育児・家事に関わること。まだ「男性は仕事、女性は家事・育児」という昭和の男性側の勝手な妄想が、民間企業だけでなく公務員の一部にも残っているような気がします。調査によると、20歳代前半の女性の就業率は他国と比較してもあまり変わりませんが、20歳代後半から30歳代になると急に減少するそうです。育児のために女性が仕事を辞めるという状況は、優秀な女性の活躍場所を失い、明らかに日本社会の損失です。

本学でも「兵庫教育大学男女共同参画推進基本方針」を策定し、積極的に取り組みを行っています。子育て中の教職員への支援、アフタースクールの拡充、附属幼稚園における預かり保育等を実施しています。まだまだ取り組みは十分ではありませんが、少しでも女性の活躍と少子化対策に役立てばと考えています。

さて、「女子力」という言葉があります。様々な定義、感覚で捉えられています。あまり良くないイメージを抱く女性も多いようです。男性が家事をてきぱきこなすと「女子力」が高いというようですが、これには私は違和感を持ちます。家庭においては男女がそれぞれの特性を生かし、お互いを尊重して家事を工夫することが求められます。育児も同様で、夫婦が工夫して協力することが必要です。教科でいえば衣食住や保育を扱う家庭科では、誰もがよりよい生活をしていく上で必要な知識や技能を教わります。中学校や高校では男性の家庭科教員は極めて少ないですが、小学校では家庭科を教えている男性教員はたくさんいます。自らの生活体験を日々の学校活動の中に生かすことによって、男女が協力することの大切さを子供たちに伝えて欲しいものです。

本誌では、女子力を「女性が輝き、活躍する力」として定義しています。これからも、この女子力が男性の積極的参加によって発揮されることで、男女が共に学び、働き、輝く大学となるよう取り組んで参ります。

学長 ふくだ みつひろ 福田光完

学長室から  
MESSAGE

